

【社名】 神名式・『皇太神宮儀式帳』は「神前神社」、大神宮式・齋宮式は「神前社」とする。訓みについては一條家本太神宮式は「カムサキノ」・吉田家本神名式は「カムサキ」とする。「神前」の表記は「かみさき」あるいは「かむさき」の兩様に訓むことが可能で、カムはカミの交替形である。それ故にいづれで訓まれてゐたかは決定できない。「サキ」は先端の意で、岬や半島の先端が神の領有する所として神聖視されてゐる例は多い。當社の所在とされる地名の神前岬は「コウザキ」と呼ばれてをり、神社名も同様である。

【所在】 式内「神前神社」の傳承地として、度會郡二見町大字松下字尾谷一、四〇七―五（度會郡松下村）鎮座の皇大神宮攝社「神前神社」がある。社地は、江集落の東方山の上（小字は許母利「二見町史」）にあり、石段の登拜道は整備されてゐる。皇大神宮末社の許母利神社と荒前神社が同座。社地については變遷があり【攝社の再興】の項で述べるが、當所に遷座直前は神前岬の燈臺付近にあつたが、明治四十年に現在地へ移轉された。神前の燈臺へ行く海岸線は潮位や波浪の影響を受け歩行が遮断されることも多い。

この岬は「伊勢の神前國崎の鎧波切大王なけりやよい」と俗謡にも歌はれた難所の一つである。なほこの岬一帯は「御

坐岩」「笏立石」「まないた石」「祓嶋」「潛嶋」などのある岩場で、贊海神事（衆皇子神社の項参照）の場所となつてゐた。明治初年に當所を訪問して鹿海村（かのめ、現伊勢市）の船役人より聞き取りをした記録（『神三郡神社參詣記』／『皇學館大學神道研究所紀要』第五輯所收）を掲げて参考にした。

贊海神事場ハ神前社ノ下の處ニて、かり家形を建、内宮十員ノ禰宜衆御着坐なり、前なる大岩ニて荒嶋海松等をとりにて由貴の御饌に供進らるなり、笏立石ニ笏を立ならべ置て、此石ハ海ノ崖ニ大岩の前ニ三つあり、東のはしの石なり、夫より大岩にて右ノ贊物取給ふト云、此大岩のおくにまないた石あり、此邊を祓嶋ト云、大濱より鯛七枚持來り、潛嶋の前海中にまな板石あり、其上ニて料利して献上するト云、鯛一枚ハ長官<sup>江</sup>持行、残りハ此處にてにたきして一口上るト云、此にたき役人ハ、江村傳八ト云内より來て勤るト云、家形を作るハ松下より來て致すト云、赤飯ハ内宮より持參なり、此御坐岩と云ハ □ 大神宮御鎮座ノ時御休被遊し岩ト云

【祭神】 荒前比賣命（『神宮大綱』明治四十五年）、『儀式帳』は「稱三國生神兒、荒前比賣命」、『倭姫命世記』は

「荒前姫」となつてゐる。

【由緒】『儀式帳』は當社の鎮座について「同内親王定祝」と記し、倭姫命によつて奉祀されたと傳へる。『倭姫命世記』は、「荒前姫參相。國名問給。白々。皇太神御前荒崎白々。恐<sub>止</sub>詔。神前社定給」とあつて、倭姫命が五十鈴川の河口に江社を定められた後、荒崎の荒前姫が國名を申し上げ、當社が奉祀されたとする。かうした傳承は、當地と神宮との結び付きの深さを語る本縁ではあるが、これには二つの面から考へることが出来る。即ち、一つは地理的な點であり、もう一つは神宮の祭儀との關係である。前者については、古代より通行の難所を、荒ぶる神の仕業としてその神を祀る事例は多く見いだされる。さうした信仰形態の流れにおいて神前神社の奉祀を位置づけることが可能である。

さうした共通性を有する點とは別に、當所の地域的特性からの面も見逃せない。すなはち、神前岬及びこの地域は神宮の北の神界に相當するといふ點である。伊勢・志摩兩國の境界域は時代により變遷が見られ、また古代に比べるとその界が面から點で認識されるやうになるが、かうした地域は同時に神宮祭祀での神供の採集場所として神聖な漁場でもあつた。特にこの神界は、三節祭に先だつて行は

れる贊海神事の場所となつてゐた。古くは鳥羽沖の島々や「伊介浦」が海藻・魚貝の採取場所であり、それらは神前を越えての近接した地に當たり、また後には『建久年中行事』に「參阿原本神崎……自鹿海乘船……到着阿原本神崎、先祭崎崎神々」と見られるやうに、當所自體が神事の場所ともなつてゐる。『倭姫命世記』によれば、倭姫命が神界を、また御贊處・御饌島を定められたとされるのはこの地域一帯に集中してをり、これは單に難所を領有する神といふ以上に、御饌處の神として神宮祭祀との密接な結び付きを認識させるものではなかつたかと想定される。

【攝社の再興】當社が何時頃退轉を餘儀なくされたかは未詳であるが、江戸時代の寛文年間に再興されることとなつた。『寛文攝社再興記』の寛文三年（一六六三）十月十一日の條には次のやうに見える。

神前社ヲ立、是ハ松下村ヨリ十町程北大海ノ端、大山ノ根ニ立申、二三十間四方形有、但カリヤノ森ト云、九月十六日ニ内宮ヨリ正員ノ禰宜一人來リ于今神事有之、社ノ四至北ハ大海祓崎也、其外山也

右にいふ「カリヤノ森」とは贊海神事の時に假屋を建てるところから稱されるに至つたのであらう（御坐清直「二宮管社沿革考」）。「祓崎」は神前岬の先端付近をいふ。

その後當社の鎮座地は變遷してゐる。『神宮大綱』によれば次のやうに述べられてゐる（二二四〜五頁）。

然ルニ中川經雅筆記ニ、二見神前社享和年中造替、但昔ヨリ森之内濱邊建之、近年高潮森皆流、仍森之内山上ニ造替奉<sub>レ</sub>鎮<sub>レ</sub>之、文化三年予贊海神事參向、於ニ件新社神前<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>登嶺岬、御社ハ所々攝社之大サ如外之造立ト見エテ、更ニ山上ニ移造セシガ、是亦風潮危嶮ニシテ、祭典執行シ難キヲ以テ、明治四十年二月、現今ノ地ヲトシテ域内ト定メ、同年六月移轉セリ

以上のやうに寛文の再興以降、享和・文化・明治年間に鎮座地の變轉を見るが、『神宮大綱』は「三ヶ所トモ儀式帳ノ四至ニ符號セザルハ遺憾ナリ」と述べてゐる。『儀式帳』の四至は「東北大海、南西山」である。

御坐清直は「松下村ノ産神ニテ天王或ハ蘇民祠ナト俗稱スル社舊風アリ。本記（大御宮本記）幸行ノ順次ニヨク協ヘレハ是本社ノ舊地ナラム」と述べ、現在の松下神社をそれとするが、「神前」「荒崎」と表現されてゐる點から推しても、當該社は少し内陸に入り込んだところであり確證に乏しいと思はれる。但し、松下神社の入口には「コウザキサン」が祀られてゐるとの土地の傳へがある。

【祭祀】祈年・月次・神嘗・新嘗諸祭及び臨時奉幣祭に

は、神宮の神職が社頭に參向して祭儀が営まれる。

【境内地・社殿】境内地は二、一八七平方メートル。域内の主林木は『神宮所屬の攝社・末社・所管社域内立木調査（第二回）』（昭和五十四年・神宮司廳營林部）によると「伊勢灣臺風によつて殆んど松が倒れたため、現況はその下木であつたユズリハ、ウバメガシ、ヤブツバキなどの常緑廣葉樹が主林木」となつてゐる。

儀式帳には「形石坐」「正殿壹宇。長四尺、廣五尺、高六尺。玉垣壹重。長四丈、高八尺。坐地壹町貳百歩。」とあり、元文三年（一七三三）の松下神社改帳（『二見町史』一五〇頁）には「一社檀 桁行五尺壹寸 梁行三尺五寸、右社段宮之林内に御座候此林境内坪數六百六拾坪……宮司持に御座候朽損次第宮司より造替致され候二社共に年寄之預りに御座候て論も宮司より我々方へ預けおり申候境内之儀地下之持分に御座候儘倒落もの御座候ても諸事我々支配仕候」とみられる。

『神宮大綱』は「正殿、神明造、板葺、南面 壹宇」「玉垣御門、猿頭門、扉付 壹間」「玉垣、連子板打 壹重」「鳥居、神明造 壹基」とある。近時の造替は昭和五十一年十月二十七日に齎行された。

（櫻井治男）